

司式:中川 真明  
奏楽:山田 絵里

前奏:「愛しまつみ神にのみ」(N.ハンフ)

招詞:平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。(マタ 5:9)

讃美歌:こどもさんびか 2(『21』205「今日は光が」)

#### 交読詩編 8 篇

01 【指揮者によって。ギテイトに/合わせて。賛歌。ダビデの詩。】

02 主よ、わたしたちの主よ/あなたの御名は、いかに力強く/全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます

03 幼子、乳飲み子の口によって。あなたは刃向かう者に向かって砦を築き/報復する敵を絶ち滅ぼされます。

04 あなたの天を、あなたの指の業を/わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。

05 そのあなたが御心に留めてくださるとは/人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう/あなたが顧みてくださるとは。

06 神に僅かに劣るものとして人を造り/なお、栄光と威光を冠としていただきせ

07 御手によって造られたものをすべて治めるように/その足もとに置かれました。

08 羊も牛も、野の獣も

09 空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。

10 主よ、わたしたちの主よ/あなたの御名は、いかに力強く/全地に満ちていることでしょう。

朗読聖書:マタイによる福音書 21:12-17

#### ◆神殿から商人を追い出す

12 それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。

13 そして言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』/ところが、あなたたちは/それを強盗の巢にしている。」

14 境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々をいやされた。

15 他方、祭司長たちや、律法学者たちは、イエスがなさった不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで、「ダビデの子にホサナ」と言うのを聞いて腹を立て、

16 イエスに言った。「子供たちが何と言っているか、聞こえるか。」イエスは言われた。「聞こえる。あなたたちこそ、『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉はまだ読んだことがないのか。」

17 それから、イエスは彼らと別れ、都を出てベタニアに行き、そこにお泊りになった。

#### 祈禱

愛と恵みに富み給う父なる御神さま、あなたの尊き聖名を賛美致します。どうぞ御国を来たらせてくださいますように。

聖霊降臨節第 15 主日の今朝、私たち一人ひとりの名前を呼んで教会へと集めてくださり、またライブ配信を通して、共に礼拝をお献げ出来ます幸いを心より感謝申し上げます。特に今日は、夏の全体礼拝として、小さな子供たちから大人まで、共に集って礼拝をお献げ出来ますことを重ねて感謝申し上げます。教会学校に通う子供たち、保護者の方々が、神さまの愛と恵みに充たされ、また共同体としての教会の豊かな交わりに加えられ、大切な肢として繋がっていくことが出来ますようにお祈りいたします。今

日は夕方、『教会学校夏の夕べ』も計画されております。これからの交わりの上に神さまの恵みと祝福とが豊かにありますように祈ります。

今月 4 日、私たちは平和聖日礼拝をお献げし、平和聖日集会を持つことが出来ました。世界の全ての人々の上に、全ての所に、神さまの平和の御支配が為されますように。私たち一人ひとりが平和を実現する者として、夫々の場で歩いて行くことが出来ますように。

顧みます時に私たちの歩みは、神さまの思いから離れてしまったり、この世に流される者であったり、あるいは自己中心的な者でありました。私たちがいかに弱く小さい者であるか改めて思い知らされました。しかし、こんなに弱く小さな私たちをも“よし”とされ、愛してくださり、生かしてくださり、導いてくださる神さまの恵みと憐れみに感謝致します。悔い改めて新たなスタートを切ることが出来ますようお導き下さい。

本日与えられました二人の説教者を感謝致します。御言葉の取次ぎをしてくださる佃牧師、鮎川牧師の上に聖霊が降り、御言葉を大胆に語らせてくださいますように、神さまの祝福と恵みが豊かに与えられますように祈ります。また説教に与る私たち一人ひとりの心を開き、御言葉の種をしっかり受け止め、それが豊かに実っていきますようにお導きをお願い致します。

東日本大震災で悲惨した方々のために祈ります。震災から 13 年と 5 ヶ月経ちましたが、今もお苦しみや悲しみの中にある方々が沢山いらっしゃいます。また東京電力福島第一原子力発電所の事故により、故郷を奪われた方々、放射能汚染の中で暮らさざるを得ない方々も沢山いらっしゃいます。能登半島地震や豪雨などの災害で被災なさった方々のために祈ります。その方々の上に神さまの御慰めとお支え、励ましがありますように。そして隣人である私たちが、その方々のことを覚え、共に生きて行こうという思いを込めて為すべき支援を行っていくことが出来ますように神さまのお導きをお祈りいたします。

パレスチナやウクライナ・ロシアでは今もお戦闘が続いており、世界各地で様々な厳しい状況が見られます。一人ひとりの命や生活が守られ、人権が重んじられ、主の平和・シャーロームが実現しますように。私たち一人ひとりが希望をもって平和を実現する者として歩むことが出来ますように。イエスさまは、この世で弱い立場にある方々の中に進んで入っていらっしゃり、共に歩まれました。私たちにも弱い立場にある方々、差別や抑圧の中にある方々と共に歩み、連帯していく力をお与えください。

今日の礼拝を覚えながらも様々な事情で礼拝に与れなかった方々の上に神さまの特別な御顧みをお祈りいたします。

この溢れる感謝と願いとを尊き主イエス・キリストの聖名によってお献げ致します。アーメン。

讃美歌:こどもさんびか 40(『21』171「かみさまのあいは」)

#### こどもへの説教「しゅをたたえよ」

鮎川健一

皆さん、暑い夏をどのように過ごしていますか。この時期、日本では神社やお寺など、また多くの町では夏祭りが行われています。その中で、最近課題になっていますが、花火大会があったり、いろいろなことで中止されたというのがありますが、それから山車やお神輿、屋台の食べ物やゲームで楽しむことがあります。

しかし“町のお祭り”と言っても、その多くは神社やお寺にお参りする、そのためにお祭りがあるということです。神さまに対して行うことですから、お参りすることが本来は一番の目的なのです。それはユダヤの人たちと同じ、神さまを礼拝しに行くのです。それならばどうして寺院の前で両替や鳩を売るお店があったのでしょうか。聖書には面白いことが書いてあります。神さまを礼拝するのに何で両替や鳩を売るお店が必要だったのでしょうか。

両替はお金を崩すのではなく、変えてもらうためでした。自分たちが持っているお金自体が神殿の中で使えなかった、献金として献げられなかったからです。それは、ローマ帝国という大きな国にユダヤの人たちが支配されていたためでした。困ったことに両替に手数料が掛ったことでした。神殿の中にいる人たちが自分たちのものにしてしまっていたのです。両替するというのは難しい話ですが、日本でも同じようなことがありました。50年くらい前までは、戦争の影響から沖縄県がアメリカのお金(US\$)を使っていて、沖縄を行き来する時にはパスポートも必要でした。日本なのにアメリカになっていた時代があったのです。

また鳩は礼拝に献げるためで、多くの人たちが神殿の入口で鳩を買っていました。遠くから来る人にとっては、傷の無い保証付きですから、助かります。しかし他で買うより値段が高く、それでも沢山の人が買っていました。問題は、集まったお金の中から神殿にお礼として沢山の金が祭司たちの物となっていたことでした。それを知っていたイエスさまはかなり乱暴なことをされました。両替や鳩を売る人たちにしてみれば邪魔をされた感じです。これは“宮清め”と呼ばれてきましたが、どういうことでしょう。

一つは、ユダヤ人以外は神殿の中に入れず、礼拝する場所に近づけなかったのも、イエスさまは「わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。」と言われました。『神の子』なるイエスさまは、“神さまを愛し約束を守るならば神さまは受け入れる、救いに与れる”と伝えたくて激怒したのです。だから、エルサレムに迎えられたイエスさまのことを子供たちが、「ダビデの子にホサナ——イエスさま、万歳——」と言っていた、同じ言葉を叫んでいたのも、イエスさまは喜んで受け止めたのです。しかし祭司長や律法学者たちは、イエスさまのことを『神の子』とは認めなかったで子供たちの声を聞いて怒ったのです。

そこでイエスさまは、大人たちが騒ぐのは神さまを心から礼拝する姿ではないと思って、こう言いました。「あなたたちは強盗の巣にしてしまった」、礼拝のために来る人たちから沢山の金を取っている神殿の祭司長や律法学者、商売する者たちは“強盗だ、神の裁きからは逃れられない、神さまに祈りを献げ、神さまと共に生きる聖なる場所を汚してしまった、欲深い場所にしてしまった”という事で怒りを顕わにされたのです。

そう言うイエスさまは、罪深い者たちに代わって神の裁きを引き受け、十字架に向かいます。それは皆が神の子とされ、父なる神さまに祈りを捧げることが出来るようになるために、でした。この後、イエスさまは十字架で死なれました。そして三日目に復活して、天に昇られて聖霊を与えてくださいました。

それから2千年、今どうでしょうか。世界中に祈りの家、キリストの教会があります。私たちは教会を強盗の巣にしてはなりません。教会は私たちのものではなく、神さまのものです。教会は神さまが褒め称えられる場所です。教会に招かれている私たちは、神さまの救いの恵みが沢山の人の

伝えられ、共に礼拝を献げる日の来ることを願って神さまにお仕えしています。

私たちはイエスさまによって与えられたこの祈りの家に入ることを許されています。色んな人たちがいます。色んな地方から生まれ育った人たちが集まっています。東京の人たちだけが入るわけではありません。信濃町界限の人たちだけが入るわけではありません。色んな人たちが入っていいんです。そのことを神さまは“宮清め”ということでも言っています。ですから一人でも多くの人たちが心から神さまの御名を褒め称え、神さまの恵みが与えられますようお願いしながら、私たちもこれから歩んで行きたいと思えます。祈りを献げます。

主なる御神さま、この時を迎えられ感謝致します。8月の夏休みの間、厳しい暑さの続く中で、天気の変化も大きくあり、世界や日本では多くの人たちが苦しんでいます。どうか神さま、この世界をお守りください。神さまの思いで充たされますように。私たちも神さまの御言葉に聴いて、神さまに喜ばれる生活ができますように。

ここに来られなかったお友だちの上にも神さまが豊かにお守りくださり、御手を差し延べてくださいますように。

このお祈りをイエスさまのお名前によってお祈り致します。アーメン。

讃美歌:506「すべては主のため」

#### 説教「祈りと賛美の歌声」

佃 雅之

今朝与えられました“宮清め”と言われる出来事のテーマは、“神殿とは何であるか?”“神殿は誰のものであるか?”ということです。私たちが日曜日毎に教会に集まり献げています“礼拝とは何か?”ということをお教えています。

イエスさまは「神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。」と書かれています。この時のエルサレム神殿は、ユダヤの三大祭りの一つ「過越祭」のために世界中から様々な献物を携えて集まった巡礼者たちでごった返していました。エルサレム神殿の境内では二種類の商売が行われていました。一つは「両替」です。この当時、20歳以上全てのユダヤ人には「神殿税」が課せられていました。神殿税は普段の生活では使われない『シケル』という貨幣で納めることが決まっています。「両替人」の仕事は一般に流通しているお金をシケルに変えることです。現代でもそうですが、「両替」には手数料が掛かります。或る資料によると、「両替」に掛る手数料は“労働者一日分の賃金ほどで大きな負担であった”と言われています。

もう一つは神殿への献物「鳩を売る」商売でした。「鳩を売る」人は神殿の外にもいたようですが、“献げられる鳩は傷のないものでなければならない”という規定がありました。神殿に献げる動物を自分で連れて来た場合は検査料を払って検査を受けなければなりません。もし、傷が見つければ買い直すこととなりますから、わざわざ自分で用意しなくても神殿で売られている検査済みの「鳩」を買った方が良く、買わざるを得ないような仕組みができていました。神殿の中で売られている「鳩」の値段は神殿の外で売っている「鳩」の10倍以上もしたと言われていました。

この二つの商売は神殿には必要なもので便利ではあったのですが法外な手数料を得ることができたために人を悪に陥らせてしまうという誘惑があったのです。“祭司を含め神殿の関係者がこの誘惑に陥っていた”と言われていま

す。「両替人」にしても「鳩を売る者」にしても、あるいは「祭司たち」も、悪意をもって巡礼者たちから手数料を搾取していたわけではないかも知れません。古くからの制度に従って、神殿での礼拝を守るために、巡礼者たちが困らないように商売をしていたのでしょう。

しかし、その様子をご覧になっていたイエスさまは激しく怒り売り買いしていた人たちを「神殿の境内」から「皆追い出」されます。「売り買いをしていた人々」とありますから、イエスさまは神殿で商売をしていた人たちだけを追い出したわけではありません。遠くから礼拝に来た人たちも追い出されているのです。イエスさまは何故、商売をしていた人たちだけではなく、巡礼者まで「皆追い出」されたのでしょうか。

言われるままにお金を払う、この世の決まり事だからしょうがない、仕来りだから、便利だから、それでは駄目なのです。そのお金は、そもそも神さまから与えられたものであります。搾取る側だけではなく、与える側にも責任があるということです。このままでは、お金のある人だけが神殿に入ることが出来て、お金のない人は礼拝することが出来ません。それでは真の礼拝とはならないのです。

私たちの神は、一切の分け隔てなく、全ての人が共に礼拝することを求められています。礼拝とは、私たちが生ける神の前に立つことです。「神殿の境内」で「売り買いする」者たちは、どちらも「神殿」に居るにも拘らず神を見ようとしていない。彼らは神を見ず、売り物である鳩やお金を見えています。

イエスさまはここで“真の礼拝とはどのようなものであるか”を示します。「『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたがたは、それを強盗の巣にしている。』神殿は「わたしの家」「祈りの家」だと言われます。神を求めるものであるなら誰でも入ってくる事が出来る、誰でも祈ることが出来る所、それが「神殿」です。しかし伝統や習慣を利用して自分たちの都合がいいことや便利さを優先して、その結果、神を求めて神殿に来た人たちを神殿から締め出してしまっている。神を求めて「神殿」に来た者を遠ざける者は皆「強盗」であります。

これは神殿での商売に限った話ではありません。今の私たちならどうでしょう。私たちの教会は、この時のエルサレム神殿のように、伝道や習慣に囚われて神不在となってしまっていないでしょうか。教会の活動が知らず知らずのうちに人間の思いが優先されていないでしょうか。教会の活動は全ての人を信仰へと導くものでなくてはなりません。私たちの活動が神を求めている人の妨げとなってしまうなら、イエスさまから「あなたがたは神殿を強盗の巣にしている」と言われてしまいます。教会を人間の都合で利用するなら、私たちも神殿から追い出されるということになります。私たちが行っている教会活動も常にとらえ直し、人間の都合ではなくて、一人でも多くの人がイエスさまと出逢って、信仰が与えられて救われるように、神さまに繋がる人が一人でも増えるようにと働くことが求められています。

神殿が「強盗の巣」ではなく、真の「祈りの家」となるために、イエスさまは怒りをもって「神殿」の意味を教えられました。イエスさまの怒りは偽物を退け、本物が見えるようにするための怒りです。礼拝を通して、時に厳しい御言葉に触れることで、神さまに従う者へと変えられる、罪人を悔い改めに導くための怒りであります。

ここで注意しなければならないことがあります。私たちが主に従って教会を守るために、時には怒りをもって誰かに立ち向かわなければならない。

正しくないと思える人には怒ってもいいと思う人がいるかも知れません。しかしそれは人間の驕り高ぶりでしょう。人間の場合は、どれほどその怒りが正義に結び付いていたとしても、自分の欲求を満たすための行為であることがほとんどです。神が人間に求められていることは“自分の正義を振りかざして怒ることではなく、静かに祈り、神の時を待つ”ことです。人と人との争いのあるところでは神を仰ぎ見て真の礼拝をすることは出来ないでしょう。

「神殿の境内」で真の礼拝を取り戻そうとされたイエスさまの下に、「目が見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来た」とあります。彼らは律法の規定によれば、神殿の中に入って礼拝することが許されていませんでした。イエスさまは神殿の境内でその人たちを癒されます。その様子を見ていた「子供たち」は、イエスさまを「ダビデの子にホサナ」と呼んでいます。「ホサナ(ὡσαννά) [נָסוּ הוֹשַׁנָּה] “ホサーア・ナーア”が、ギリシャ語に音訳されて初代教会に伝えられた時には祝福の歡呼と理解された」というのは“主よ、お救い下さい”という意味の言葉です。主の下に集められた人たちが、癒され、子供たちと一緒にイエスさまを「ホサナ、“主よ、”と告白する、これこそが教会の業であり、真の礼拝の姿であるということです。

しかしこれを見た「祭司長たちや、律法学者たちは」、「腹を立て」た、とあります。ここに一つの大きな真実が示されています。“自分を賢いと思う者、昂ぶる者には真理は隠される”ということです。私たちが十分な注意が必要です。「わたしの家を強盗の巣にしている」というイエスさまの言葉は、「神殿の境内」で「売り買いしていた人たち」、「祭司長・律法学者たち」が、隣人に全く配慮をしていない、愛の欠落を指摘する言葉です。隣人への配慮を忘れた教会は、たちまち「強盗の巣」と化してしまうということです。「祈りの家と呼ばれる」「神殿」、教会は、神を求めている者が神と出逢い、神に祈る場所です。この時、礼拝を献げるために神殿に来た人たちはどの様な気持ちで来たでしょう。私たちがどのような思いを抱えて、今日、教会に来たのでしょうか。“神と出逢いたい”“神が生きて働いておられることを味わいたい”“神に縋りたい”、様々な問題を抱えて生きている私たちですから、救いを求めて祈りを献げに来たのではないのでしょうか。イエスさまは、礼拝者の祈りに応えて、「目が見えない人や足の不自由な人たち」を癒されました。聖書が「いやす(θεραπεύω)」というときの基本的な意味は「奉仕する・仕える」という意味です。

私たちが献げる『礼拝』は“最も大切な神への奉仕だ”と言われます。しかし、実は神が私たちに先立って礼拝の場を整えてくださり、御言葉を語ってくださる。肉体的、精神的、霊的に欠けや痛みを抱えている私たちを清め癒すために、神が私たちに仕えてくださっているのです。神殿で献げられる礼拝とは、神ご自身が私たちのために仕えてくださっていることを覚え、感謝する所であります。

ですから「境内」に居た「子供たち」は“主よ、お救い下さい”と叫びました。「神殿」で「売買をしていた人たち」や「祭司長や、律法学者たち」の目には、今、目の前に救い主が立っているのに見えていません。見ようともしていませんが「子供たち」には見えていました。「子供たち」はありのままに見るのです。「ダビデの子」が来てくださった、“今、救い主が目の前に立っている”、その神の恵みに対する感謝が「幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を」宿らせませす。

神を感じ、神を賛美したのは聖書を知り尽くした「律法学者たち」でも、「神殿」で働く「祭司長たち」でもありませんでした。神が求められている『真の礼拝』には知識や資格は必要ありません。『礼拝』に求められていることは“飾らない心からの祈りと賛美の歌声”です。

今朝、私たちは「子供たち」のように“イエスを救い主として受け入れて、祈り賛美する者であるように”求められています。この信濃町教会が「子供たち」と一つとなって、主を賛美し、共に祈り合い、共に仕え合う教会でありたいと切に願う者であります。

お祈りを致します。

聖なる神、今朝、この教会に連なる全ての者が一つとなって、あなたに礼拝を献げることが許されましたことを心から感謝致します。

この信濃町教会が、この世にあつて、様々な思い煩いにあつても、あなたの「神殿」として、あなたの御栄光を表すことが出来ますように。私たち一人ひとりをも、聖めてくださり、真の「祈りの家」としてください。

この教会に属する病める者、重荷を負う者、慰めを必要としている者を顧みて、癒しと平安をお与えください。

私たちの救い主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌：こどもさんびか 119(『21』507「主に従うことは」)

#### 献金

感謝の讃美歌：65-2「今ささげる」

感謝の祈り(別紙)・主の祈り

派遣：讃美歌 88「心に愛を」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告：(特記事項なし)

後奏：「われ心より喜び」(J.S. バッハ)